

交通

評論



役員だった稲松さんは優しく頼りになる先輩だった。

地方の学会の折に、古い旅館の修学

梅雨時に咲くアジサイを見ると、必ず思い出すのが、土壌学者・稲松勝子さんのことである。遺作となった著書「土をはかる」(日本規格協会、1987)という小さい本の中にアジサイの花の色についての記述がある。

アジサイはもともと紅色の色素を持っているのだが、土壌の酸性が強いとこゝろでは土壌中のアルミニウムを吸収して鮮やかな青色になることを、土壌の構造や化学成分とともに分かりやすく説明されている。

旅行用の大きな部屋の片隅に2人で泊まり、翌日はその部屋が研究発表の会場になったこともある。筆者はその後、別分野に進んだが、稲松さんはパスツール研究所土壌微生物研に留学され、後年は土壌研究室長として後輩を育てよい仕事を残された。

およそ50年前、筆者が大学院生としてはじめて参加したのが「日本土壌肥料学会」であった。当時、女性会員の極端に少ないこの学会で、蚕糸試験所の若い研

アジサイの色

土器屋 由紀子

土壌は地殻変動や火山噴火由来の岩石が起源である。岩石が風や水や熱の作用を受けて長い間に砕け、礫(れき)、砂、粘土などに変化する。単に機械的に砕けるだけでなく化学的にも変化を受ける(風化)。

火由来の岩石が起源である。岩石が風や水や熱の作用を受けて長い間に砕け、礫(れき)、砂、粘土などに変化する。単に機械的に砕けるだけでなく化学的にも変化を受ける(風化)。

この風化生成物は母材と呼ばれ、その後バクテリアやカビのような微生物、下

である(A層)。次のB層はA層のすぐ下、有機成分や無機成分の供給を受け、物質が集積している層である。その下が母材の層(C層)である。

等なコケから高等植物、ミズから人間にいたるまでの動物などの生物の力でさらに変化を受けて、層位別の土壌が出来上がる。

もちろん、地域の気象要因などによって、また耕作地では耕作条件によって、それぞれの層の厚さや化学成分は変化する。また、土

一番上の層は気候や生物の作用をもっとも強く受ける部位で、落ち葉などの有機物が蓄積する領域で、他の層よりの黒味を帯びた層

伸びやすさや養分の吸収されやすさを決めている。土壌の理解には、これらの層分布と構成する三相の知識は必須で、古来の農業の知恵も実はその上に成り立っている。

している。農耕地の除染作業は、したがって、まず表層土を剥ぎ取る作業から始めることになる。これまで丹精込めて育てた作土の大切な部分であり、剥ぎ取ることには大きな痛みを伴う。完全に元に戻すには数年かかるだろう。

しかし、今後の農作業のためには、やらなければならぬ作業であるため、どうやって効率よく表層だけを剥ぎ取り、再びよい耕作に適した土壌に戻すかが最大の課題で、各地で試行錯誤を繰り返しながらの作業が続けられている。

福島県飯館村は標高220mから600m、季節は少しゆっくり巡ってきて、アジサイが咲くのは7月に入ってからである。しかし計画的避難区域内のため、半ば廃屋になった庭に残るこの美しい花を見る住民はほとんどいない。

(江戸川大学名誉教授)